

## 寺脇研さん語る

半年後の9月15~16日、愛知県刈谷市で「障害児の高校進学を実現する全国交流集会」が開催される。全体会の基調講演の講師が、京都造形芸術大学教授の寺脇研さんに決まった。寺脇さんは文部省に長らく勤め、写真の前川喜平さんとの共著もある。この本の中から、全国交流集会に関係するような寺脇さんの言葉を抜き出しておきたい。



知的障害のある子どものための高等教育の場をつくるという考えに、私も賛成なんですよ。知的障害のある人は、より上級の学校になど行くわけがないという思い込みが、こういう発想を排除しているわけです。「いつでも、どこでも、誰でも学べる」というのが生涯学習の考え方ですが、それで言えば、障害があろうとなかろうと、そのための環境づくりは、やらなきゃいけないことなんです。

じつは私は、生涯学習を担当していた90年頃から「障害者の生涯学習」という考え方が必要だと思っていたんですね。ところが実際には、知的障害の場合には現在でも特別支援学校の幼稚部、小学部、中学部、高等部と来たその後は、せいぜい一部に高等部専攻科がある程度で、それらを卒業してから後となると、学べる場は、ほとんど何もないわけです。視覚、聴覚障害や肢体不自由、病弱の場合は高等教育機関への進学機会があるんですけどね。

それと、これはあらゆる障害に関してですが、いわゆる健常者には社会教育や生涯学習の場が、いろいろ用意されているのと同様に、障害者にも、そうした場をつくっていかなくてはいけないと思うのね。また、障害者が学校だけでなく地域の中で健常者と共に学んだり活動したりする場も必要です。

高校というのは、子どもたちが社会へ出ていくときの“滑走路”なんですよ。

当時の下村文科大臣がこの映画（みんなの学校）を観て感銘を受け、木村先生とも面談した。すばらしい学校だと大臣が評価してくれたのはいいんだけど、「でも全部の学校がこうなるのはちょっと…」というニュアンスの発言があったと聞きました。そうじゃない。全部の学校がこうなれば、すべての子どもが自分の居場所を持ち、学びに打ち込むことができる。これこそ、これからの時代の学校の、あるべき姿だと思うんです。

学んだことをすぐに休んでいる友達に伝えようとする学生、それを受け止める学生の、ともに学ぶ熱意に打たれた。こういう若者たちがいる限り、かれらに学びの自由を与えていくこと、学びを阻害する社会的・経済的要因を取り除いていくことをやらなくてはならないと、改めて強く思う。

(2018年3月24日)